

未来予測で夢を語ろう

跡見学園女子大学マネジメント学部教授 山澤 成康

未来を思い描くことは、人間の生活を豊かにする原動力となる。昔からさまざまな未来が描かれている。100年以上前の未来予測として有名なのは、報知新聞が1901年正月に掲載した『二十世紀の預言』だ。自動車の普及、海外旅行ブーム、東京―神戸が2時間30分で結ばれることなど23項目の予測があり、概ね当たっている。実現していないのは、動物との言語翻訳機や台風に砲弾を撃ち込んで雨にすることくらいである。

1950年代に描かれた手塚治の『鉄腕アトム』の舞台は、21世紀。アトムが生まれたのは、2003年4月である。21世紀には自動車が空を飛び、アトムのように言葉も話せて空も飛べるロボットができると考えられていた。

一方、灰色の予測もある。1948年に書かれたジョージ・オーウェルの『1984』は、ビッグブラザーと呼ばれる指導者のもと、24時間テレスクリーンで監視され、言いたいことも言えない息の詰まる未来を描いている。

1972年に発表されたローマクラブの『成長の限界』も科学技術の発達が手放しで明るい未来をもたらすわけではないことを明らかにした。

第一次オイルショック辺りを境に、素朴な科学技術信仰は後退し、人々の志向は「自然回帰」へと向かった。万国博覧会のテーマがそれを象徴している。1970年の大阪万国博覧会は国を挙げてのイベントとなり、テーマは「人類の進歩と調和」である。未来を先取りしたような建物が並んだ。しかし、その後「進歩」は重要なテーマではなくなった。1990年に同じく大阪で開催された国際花と緑の博覧会のテーマは「自然と人間との共生」であり、2005年の愛知万博のテーマは「自然の叡智」である。科学技術と自然をどう折り合わせるかが主題に変わっている。

文部科学省科学技術政策研究所の「科学技術

予測調査」も転機を迎えている。この調査は、30年後程度の未来を見据えてどのような科学技術が普及するかを予測するもので、1971年から5年おきに実施されてきた。

予測にはデルファイ（神託という意味）法が使われる。約3,000人の科学者や技術者に2回アンケート調査を実施する。1回目の調査結果を極端な意見を省いたうえで共有し、再度アンケートを行い、意見を収れんさせていく。過去の調査を分析すると約7割が的中している。

2005年には安倍政権下で、この予測調査とリンクする形で「イノベーション25」という政策提言が行われた。2010年6月には第9回目の調査が発表され、2030年に「話し相手になるロボット」、「渋滞に巻き込まれずに自動で目的地に行く車」、「宇宙観光」などが実現するという結果となった。

ただ、以前に比べると技術予測への関心が薄れている。予測対象期間が長過ぎて、企業の実務に直接利益にならないことや、各回ごとの未来像がそれほど変わらないことが理由として挙げられている。インターネットやiPS細胞のように予測されなかった技術こそがブレークスルーをもたらしているという事情もある。

しかし、科学技術予測の存在意義は、経営に直結するビジョンを提示することだけではない。コストや技術的な困難はひとまず横に置いて、わくわくするような未来を提示する役割が重要だ。未来予測には夢の要素がないとつまらない。

ディズニーランド内のトゥモローランドは、開園当時から未来イメージを提示し、21世紀になった現在も未来であり続けている。手が届かない未来を描き、それを子供に伝えることが、必要だと思う。子供に対して、ばら色の未来を語り続けることも大人の役割の一つではないだろうか。